

■巻頭言■

菅生キリスト教会牧師
中山信児

「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」
ヨハネの福音書 8章31-32節

讚美をすることはクリスチャンにとって大切な信仰の営みです。それは教会の信仰の証しであるだけでなく、信徒一人一人の信仰の養いにも重要な意味を持っています。それだけに、今、教会には讚美について神学的に受けとめ、深めていくことが求められています。

神学的に受けとめるとは、言い換えれば、神さまのみこころが何であるかを聖書のみことばから教えられ、それに従って歩むことでしょう。そこでは讚美を捧げる私たちの思いではなく、捧げられるべきお方のみこころがまず第一とされるはずで、神さまのみこころを第一とするとともに、人の願いや思惑を越えた神さまの働きが現れます。さらに言えば、神さまのみこころこそが、私たちに罪の現実とすべての問題からの自由をもたらします。

讚美については、福音派の諸教会の中にも「混乱・困惑・戸惑い」があるとされています*。そのような中で「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして」みことばと向き合いながら、自分の一あるいは自分の教会や教派の一経験や理解をはるかに越えた神さまのみこころを求めたいと願われます。聖書には、神さまの大きさ、そのみこころの深さ広さが余すところなく記されています。パウロは「みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中において御国を継がせることができるのです」と言いました（使徒20:32）。あらゆる問題の解決がここにあることを率直に信じます。

私たちの願いは、福音派の諸教会が、讚美と讚美歌と讚美歌集について、祈りと力を合わせて、共にみこころを求め、みこころを行わせていただくことです。そのことを、みことばに信頼し、みことばにとどまりつつ、なさせていただきたいと思います。

*参照『讚美の聖書的な理解を求めて』3頁 いのちのことば社

◇第二回◇福音主義教会音楽カンファレンス◇

これからの会衆讃美を考える

講演「聖書における賛美」

—特に神殿礼拝における賛美について—



講師：遠藤嘉信師



(日本同盟基督教団 和泉福音教会牧師)

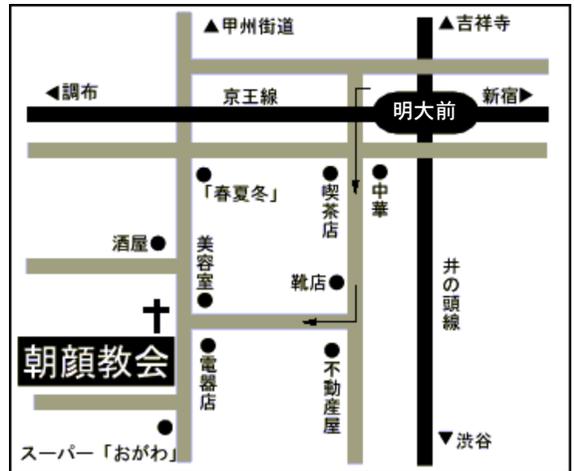
讃美：エヴァンゲリウム・カントライ
福音讃美歌協会設立準備についての報告

日時：2005年5月20日(金) 午後6時半～9時

場所：日本福音キリスト教会連合 キリスト教朝顔教会

参加費：無 料

会場地図



京王線・井の頭線明大前駅下車。徒歩3分。

◆主催◆

福音讃美歌協会準備委員会

■お問い合わせ■

福音讃美歌協会準備委員会

世田谷中央教会 安藤能成

TEL 03-3428-2388

Email: fsk@hymnos.org

Information

福音讃美歌協会設立総会

2005年7月18日(月・祝)

福音讃美歌協会準備委員会

委員長	安藤能成	(日本同盟基督教団)
副委員長	植木紀夫	(日本福音キリスト教会連合)
委員	石川弘司	(日本同盟基督教団)
委員	井上 義	(日本同盟基督教団)
委員	中山信児	(日本福音キリスト教会連合)
委員	飯田勝利	(日本福音キリスト教会連合)

オブザーバー

梅田與四男	(日本自由福音教会連盟)
後藤喜良	(日本自由福音教会連盟)
鴻海 誠	(いのちのことば社)
長沢俊夫	(いのちのことば社)

事務 高橋満基

(2005年3月現在)

「これからの会衆讃美を考える」 発題報告

■会衆讃美の現状と未来を考える（発題／ディスカッション／質疑）

全体報告（コーディネーター）	井上 義
発題Ⅰ 歌詞の観点から	中山信児
発題Ⅱ 音楽の観点から	植木紀夫
発題Ⅲ 礼拝神学の観点から	白石剛史

全体報告

■等々力教会牧師 ■井上義■

昨年11月20日（土）、「これからの会衆讃美を考える」との表題の元、世田谷中央教会にてカンファレンスが開かれました。おもな内容は、礼拝（30分）、発題&質疑（2時間）でした。

ここでは特に「発題&質疑」の部の報告を致します。発題のテーマは「会衆讃美の現状と未来を考える」で、各自原則20分ずつ、このテーマを念頭に置きつつ、a) 歌詞の観点から（中山信児）、b) 音楽の観点から（植木紀夫）、c) 礼拝神学の観点から（白石剛史）と、三者三様の立場と問題意識からの発題がなされました。

発題者の主張の詳細は、他の記述に委ねるとしまして、ここでは全体的な印象を述べさせていただきます。

第一に、「これからの会衆讃美」を予見しつつ語る事の難しさです。現状を考察する事、そしてそれに対する対策や考え方を述べるところまでは出てくるのですが、では次に何が来るか？という問題までは十分深めることがで

きませんでした。

第二に、会衆讃美という課題についての切り口の多様性です。賛美歌学的課題、礼拝学的課題、音楽的課題、そして哲学的課題に至るまで、会衆讃美を考える際の切り口は実に多様です。恐らく、多くの参加者にとって、今回発題者が提示した問題点は、あまり普段考えた事も無いようなものが多かったのではないかと思います。しかし、それこそが、このカンファレンスの一つの目標でもありました。即ち、様々な問題点を多面的に取り上げ、問題意識の深まりを図る、という事です。そのような意味では、もっともっと色々な角度から、「会衆讃美」という教会の神学的最重要課題の一つが、取り上げ、議論されていく事の必要を感じました。このカンファレンスが今後もそのような議論の呼び水となることを願います。

発題Ⅰ 歌詞の観点から

ここでは讃美歌詩の内容と表現について論じますが、その前に讃美歌という歌の特徴について2つのことを確認したいと思います。

第一は、讃美歌は、聴くための歌である以上に、会衆が歌うための歌であるということ。第二は、讃美歌はそれだけで完結するのではなく、礼拝の中でみことばと共に用いられて働くということ。

讃美歌詩の内容と表現について上の点を踏まえて考えたいと思います。

福音的な立場から考えるとき、会衆が礼拝で歌う讃美の内容は、聖書のみことばを正しく踏まえていることが、まず求められるでしょう。そのときに忘れてならないのは、みことばの真理としての厳格さとともに、みことば自体が持つ福音の広がりについても正しく受けとめることです。みことばが私たちを一致と謙遜に招いていることを覚えたいと思います（ローマ12:16）。

讃美歌詩の表現の面では、評価の尺度として「わかりやすさ」と「うつくしさ」を提案したいと思います。

もちろん、一つの教会を考えてみても、老若男女、信仰歴・教会歴も様々な会衆が、初めから「わかりやすさ」「うつくしさ」について同じ判断を持つことはないでしょう。その意味では

■菅生キリスト教会牧師■中山信児■

「わかりやすさ」と「うつくしさ」は私たち自身が磨き上げていくべき発展性のある尺度と言えるでしょう。

これと関連して、口語と文語の問題があります。一般に口語は美しさでは劣るが分かりやすく、文語は美しいが分かりにくいと言われます。しかし、美しい口語もあれば、分かりやすい文語もあり、その逆もあります。

そして、讃美歌に限らず、分かりにくいことを教えて継承することも教会の役割であることを考えるなら、口語か文語かという固定的な基準で讃美歌詩の良し悪しを判断するのではなく、内容では「みことばを正しく踏まえている」かどうか、表現では「わかりやすさ」「うつくしさ」という尺度で測ることが大切なのです。

最後に、これからの会衆讃美がより豊かにされるため、実際に讃美歌を作詩していただくことをお勧めしたいと思います。そのためにまず大切なことは、みことばの語りかけや神さまの導きに敏感な心でしょう。作詩の技術を磨くためには、他国の讃美歌詩を翻訳したり、特定のメロディーを想定して作詩していただくことも有益です。その場合、最初はアクセントとメロディーの関係など、細かいことにあまり神経質にならずに自由な発想で取り組むのがよいでしょう。

発題 II 音楽の観点から

「会衆讃美の音楽」を考える

「讃美歌」という課題は、まず神学のそれです。しかし同時に神学・文学・音楽等の様々な面が互いに作用し合う立体的な課題です。福音の重要なメッセージが込められている素晴らしい詩でも、音楽がそれに呼応していないと「歌われない讃美歌」になりかねません。またいわゆる「愛唱歌」において、親しみ易い音楽の陰で、詩の内容の吟味がおろそかになってしまうこともあるかも知れません。

ここでは個々の讃美歌における音楽のあり方を論じるのではなく、「会衆讃美」という「共に歌う」営みについての音楽について考えます。

一つは、現代に遣わされた教会が、現代の文化の中で共に感受できる音楽である必要でしょう。17世紀以前の音楽だけ、20世紀以降の音楽だけ、などでは会衆讃美という礼拝共同体の営みは困難になります。そこにはバランスが必要です。また会衆が多大な歌唱力や必ずしも歌唱練習を前提としないことを考慮するならば、メロディー音域やリズム構成などは会衆の現実に配慮される必要があるでしょう。例えば「神はわがやぐら」は元々シンコペーションを伴う鋭いリズムでしたが、会衆が歌い継ぐ歴史の中で単純化してきました。ゴスペルのソロシンガーが歌

■キリスト教朝顔教会音楽主事 ■植木紀夫

う美しいメロディーが、青年会で10人で歌うには難しすぎる、と言ったことも経験されたことはあるでしょう。

もう一つは歌詞と音楽がどのように一体（その音楽における方法論は様々でも）と成り得るものとして取り組まれているかが、それが歌う者に意識されなくても（いやそれを意識せずに歌えるから、共に讃美することそのものに心を向けられる！）、共に歌う営みを育くむのに貢献するということです。例えば詩の持つ構造（前半：主への問いかけ、後半：主からの答え）と音楽の構造（前半：半終止や偽終止 後半：和声的な解決）の一致は、音楽が歌詞に、歌詞が音楽に息吹を与えます。伝統的なアクセント（4拍子の場合：1拍目と3拍目）とオフビート（同：2拍目と4拍目）の違いは、歌詞のアクセントに沿ってメロディーにのることが望まれるでしょう。

会衆讃美における音楽の課題は、「会衆」が「共に歌う」ことを通して成される「主への讃美」を、実際の行為たらしめる再前線にあります。「会衆讃美」の今後について、それぞれの音楽表現の方法論を尊重しつつ、音楽の価値観も多様化する現代において、共に教会の課題に取り組んでいければ、と願われます。

発題III 礼拝神学の観点から

礼拝における多様性（個々の会衆の特殊性など）を議論することの有意義性を強調するため、現象学的方法論によって会衆賛美を考えてみたい。

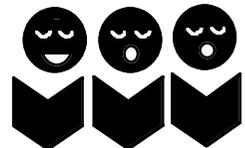
そのような神学への手がかりの一つは、受肉神学にあると思う。聖と俗、霊と肉、永遠と刹那、普遍と特殊などが必ずしも背反概念ではないということ、神ご自身が私たちに証してくださったもの。それが神の受肉である。もちろん、俗・肉・刹那・特殊が、いつでも聖・霊・永遠・普遍を表わすのではない。そう信じるのは偶像礼拝である。しかし、前者が後者を表す可能性がある。前者が後者の接触点として機能する場合である。接触点は普遍的価値観としては相対化されなければならないが、各人における意義としては抜き差しならぬ重要性を持つものである。

賛美について言うならば、讃美歌自体、楽器自体、歌集自体が聖なるものではない。それらは相対的なものである。しかし同時にそれらはある方々にとってかけがえのない神との接点なのである。このことも尊重しなければならない。人が一人一人、何をもって神を経験するかが違っているということ。それが多様性・特殊性をしっかりと踏まえることに我々を導くのである。

■のびどめキリスト教会牧師■白石剛史

たとえば讃美歌の歌詞についての工夫が考えられよう。「神は偉大だ」「神は恵み深い」「神は大いなる方」。どれもその通りであるが、人は一足飛びにそこへ到達するのではない。本当に神の偉大さや恵み深さなどを実感している人には、具体的な接触点があったはずである。それゆえに「神」「神」と連呼するのではなく、人間の醜さを具体的な言葉でじっと見つめることで、その醜さに痛んだ心が聖なる神をあこがれ見させるようにしたり、人間の頼りなさ、移ろいやすさを見つめ叫ぶことで、常に変わらない真実なる神を思わせたり、小さな人間のちょっとした真実を歌うことで、真実の源であり、常に真実である神をたたえる思いが深めるように導くなどの工夫が重要であろうと思われる。

*発題後に聴衆から質問があった。「接触点」や「現象学的視点」という言い方が、従来の告白型神学に立つ方々には受け入れにくいものであったようである。発題者自身、言葉づかいの慎重さを心がけなければならないと思われた。



福音讚美歌協会準備委員会・会計報告

(2004年7月1日～2005年1月31日)

準備委員会の会計について下記の通り報告致します。準備委員会の段階での経済的な必要の中心は、ジャーナル発行諸経費とカンファレンス開催関係費用です。第一回のカンファレンスには経費の計上がありませんでした。

尊い献金を感謝致します。続けて福音讚美歌協会の立ち上げに向けて、経済的な必要が備えられ、準備委員会がその責務を全うすることができますよう、お祈りとサポートを宜しくお願い致します。

財務担当 植木紀夫

[収入]	
献金 (19件)	350,600

収入計	350,600

[支出]	
福音讚美歌ジャーナル発行諸経費*	85,490
アルバイト人件費	15,000
交通費	2,160
通信費	450
消耗品費	3,285
支払手数料	550

支出計	106,935

[残高] 243,665

*福音讚美歌ジャーナル発行諸経費 内訳
印刷費 ¥54,100、執筆謝礼 ¥18,000、通信費 ¥13,390

讚美歌コラム その二「福音主義信仰と讚美歌集」

等々力教会牧師 井上義

讚美歌集には、編纂者の信仰のスタンスが反映されます。讚美歌集編纂においては、どの賛美歌を残すのか、またどのようなタイプの賛美歌をより多く収録するのかといった選曲の問題や、「包括的にバランス良く」集めるのか、あるいはあえて「個人的にある種の偏りを潔しとする」のかといった方針についての検討が必要です。これらは一見趣味の問題のようでもありますが、しかしそこには教会の信仰の優先順位やアイデンティティーが現れます。

福音派の信仰のアイデンティティーは何か、という問いは大きな問いですが、賛美歌作品で考えると、たとえば「十字架」「キリストの唯一性・絶対性」「悔い改め」「みことば」等の内容の優先性が考えられるでしょう。また伝統的には個人的・敬虔主義的なものが、しかし現代の福音主義神学の反省の文脈においてはより公同的あるいは社会的な内容のものも含まれるかもしれません。

賛美歌を歌うという行為は、自分達が何者であるのかを文字通り「声高」に公に示す行為です。ですから讚美歌集には「信仰告白書」としての性質があります。そこでは、教会の過去の信仰の遺産が評価され、そこに何を残し何を外すか、どの歌を次の世代に引き継ぎ、これから何を歌っていくか、注意深く検討されます。

このように考えますと、讚美歌集編纂は個人や他教派に委ねるべき営みではなく、むしろ教派や教団が自らの信仰のアイデンティティーに鑑みて行う事が望まれる、神学的な営みであると言えるでしょう。

◆◆祈りの課題◆◆



1. 諸教会の理解と協力をいただいて「福音讃美歌協会」を立ち上げることができるように。
2. 福音的な信仰に立ち、讃美歌の課題に重荷を持って関わってくださる方々（教派、教団、教会、牧師、信徒）が、さらに起こされるように。
3. 経済的な必要が満たされるように。
4. 準備委員のために。主に支えられて、委ねられた務めを全うすることができるように。

※献金者名（敬称略）

2004年7月1日～2005年1月31日

日本同盟基督教団（1） JECA 菅生キリスト教会（6） JECAキリスト教朝顔教会（1） JECA我孫子福音キリスト教会（1） JECA都賀キリスト教会（1） JECA北方キリスト教会（1） 刑部照美（1） 齊藤眞木子（1） 高橋和江（1） 小見勲（1） 三川献児（1） 岩瀬佳子（1） 中山信児（1） 中山和子（1）

カッコ内の数字は件数です。

献金の領収は払込書をもって代えさせて頂きましたことをご了承ください。

From Editor  編集後記

『福音讃美歌ジャーナル』創刊準備2号は、いかがだったでしょうか。今回は、昨年行われたカンファレンスの報告に多くの紙面を割きました。ぜひ皆様からのご意見、ご感想、ご批判などお寄せください。

さて、一つお詫びがあります。今回、紙面の都合で「教会の声」欄をお休みにしなければなりませんでした。原稿をお寄せくださった方、楽しみにして下さっていた方に、お詫びいたします。

また、一部用語について表記の不統一がありますが、執筆者の意図を尊重して、あえて揃えておりません。ご了承ください。

最後にになりましたが7月に予定されている設立総会のために、皆様のお祈りを願います。

(な)

福音讃美歌協会準備委員会

郵便振替口座

〒154-0015 東京都世田谷区桜新町 1-14-22 番号 00190-5-171723

世田谷中央教会内 TEL 03-3428-2388 名称 福音讃美歌協会準備委員会

Email: fsk@hymnos.org

HP: <http://www.hymnos.org/fsk>

発行者・安藤能成 編集者・中山信児